

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アラビアンナイト：ファンタジーの源流を探る

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4799

世紀末の夢

マルドリユス版

マルドリユス版の人気

日本でもっとも読まれているアラビアンナイトは、英語から訳したバートン版とフランス語からのマルドリユス版でしょう。マルドリユス版は一八九九年から一九〇四年にかけて出版されました。日本語訳が完成したのは第二次大戦後のことですが、流麗な日本語訳もあいてあって多くの愛読者を獲得してきました。

バートンの宣伝文句を信じてしまった南方熊楠が、バートン版こそが原典にもっとも忠実な翻訳だと思ってしまったように、マルドリユスの前書きを真に受けた人たちも、マルドリユス版こそが決定版アラビアンナイトだと信じてしまいました。マルドリユスは自著の前書きで「アラビアの原文が単に文字を変えられ、フランス文字に変えられたに過ぎぬ」忠実な逐字的完訳であることを強調し、次のように記しています。

……誠実にして論理的な、唯一の翻訳方法が存在する。すなわち、まさにまばたく^{まぶた}瞼のつかの間の皴^{しゅ}ほども弱められない没我的逐字訳を行い、心ゆくまで味識すること……。

この方法は暗示的なるがゆえに、最大の文学的迫力を生じ、歡喜の欣びを与える。(『千一夜物語 1』岩波書店)

ところがボルヘス(一八九九〜一九八六)は「千一夜物語の翻訳者たち」というエッセイの中で、「青銅の町の綺譚」(第三三九夜〜三四六夜)を引いて「マルドリユスの誠意を疑う」と述べています。該当箇所を岩波書店版から引用してみましょう。

……水は、この泉水に注ぐために、この部屋の床に掘られた美しい形状の四つの溝に添うて流れてくるのですが、どの溝も、独特の色の床を持っていました。第一の溝の床は雲斑石の床でしたし、第二番目のは、黄玉、第三番目のは、エメラルド、第四番目のは、トルコ玉でできていました。したがって、水は、一つ一つの床の色によって彩られ、天井の絹布に漉されて柔らかくなった光を受けて、あたりの品々や大理石の壁に、海の風景のような和らぎを投げかけていました。

この箇所はバートン版では次のようになっていきます。

……床の水路を流れる水はさまざま色あい的大理石で作られた、たいそう大きな貯水池へ落ちていたのでございます。(「真鍮の都」)

バートンと同じカルカタ第二版から訳した東洋文庫版では次のとおり。

……水流はかの四つの客間の床の水路を流れ、こうして出来た四つのせせらぎは、色様ざまの大理石で造った大きな池に流れこんでおりました。(「黄銅城の物語」)

多国語に通じていたボルヘスは三つのドイツ語訳と二つの英訳の該当箇所を確認し、マルドリユスは原文にはないものを描いて色づけした、こういうことができるのは挿絵画家であって翻訳者ではないと述べています。バートンが原文にはない性愛描写を書き加えたように、マルドリユスの流麗な筆は華々しくも幻想的な東洋の姿を描き出したのです。マルドリユス版が愛読されたのは、文章の妙もさることながら、文字のあいだから絵のように浮き上がってくる豊麗なイメージにもあったと言えるでしょう。

また、バートン版とは違った視点で官能的な女性像を造りあげたという点も指摘されてき



ジョゼフ・シャルル・ヴィクトル・マルドリュス (1868~1949)

ました。つまりバートン版の女たちには、ときとして煩惱ぼんのうのままに情熱的な道を突き進んでいくイメージが加味されているのに対し、マルドリュス版の女たちには、艶なまめかしくも優しい心遣いをもって男につくす純情可憐な風情が与えられているというのです。バートン版もマルドリュス版も方向の違いこそあれ、それぞれにヨーロッパの脳内妄想によって脚色されていたと言えるでしょう。

マルドリュス版が出版されるまでフランス語圏の人々はおっぱらガラン版に親しんでいましたが、十八世紀の宮廷文化にそった色づけがなされていたガラン版は時流にあわなくなっていましたから、官能的かつエキゾチックなオリエンタリズム絵画をながめるかのごときマルドリュス版が人気を博したのは自然な成り行きでした。

ジョゼフ・シャルル・ヴィクトル・マルドリュス

ジョゼフ・シャルル・ヴィクトル・マルドリュス(一八六八~一九四九)はカイロに生まれ、最初はレバノン、次いでパリで医学教育を受けました。マルドリュス家の先祖はコーカサス出身だったようですが、マルドリュスの祖父はナポレオンのエジプト遠征のさい

にフランス軍の会計担当官としてエジプトに渡り、そのままカイロに留まってムハンマド・アリーの財務顧問にまで出世しています。なおカイロで裕福な暮らしを送っていたマルドリユス家は、カトリックの信者でした。マルドリユスの妻となったりユシー・ドラリユール・ドリユスは女流作家として知られており、いくつかの作品を残しています。

フランスで医学を修めたマルドリユスは、内務省の衛生官となり、モロッコをはじめとする北アフリカのフランス植民地で勤務しました。文学界に友人が多く、ステファヌ・マラルメ（一八四二〜一九八）、アンドレ・ジード（一八六九〜一九五二）、マルセル・ブルースト（一八七一〜一九二二）、モーリス・メーテルリンク（一八六二〜一九四九）らとは親しいつきあいがありました。彼らはいずれもマルドリユス版アラビアンナイトの愛読者でした。ジードやメーテルリンクによる情熱的な賛辞は、『マルドリユス版 千一夜物語 第一巻』（岩波書店）の巻末に収録されています。またブルーストの『失われた時を求めて』の中に、アラビアンナイトをめぐるエピソードがたびたび登場していることはよく知られています。

アラビアのロレンスことトマス・エドワード・ロレンス（一八八八〜一九三五）もマルドリユス版の愛読者でした。一九二三年、彼はマルドリユス版を英訳する相談を受けます。ロレンスは「バートン版は読むに耐えない」と言いきり、マルドリユス版の翻訳には意欲的でしたが、この企画は、版權がとれなかったために流れてしまいました。というのも同年、ポリーズ・マザーズによる英訳が出版されたからです。ポリーズ・マザーズによるマルドリユ

ス版の英語訳は高く評価されているのですが、『必携アラビアン・ナイト』の著者アーウィンは「ポーク・マザーズの訳はよくできていてくれるけれども、(マルドリユス版を) 翻訳する価値があったかどうかは別問題」と手厳しい言葉を述べています。

マルドリユスはアラビア語原典から持ち出してきたパーツを組み立てて、時としてオスカー・ワイルドかステファン・マラルメが書いたのではないかと思われるような大げさな改竄版アラビアン・ナイトを作り上げた。マルドリユスが編んだこのアラビア物語集は、遅れてやってきた「世紀末」趣味の作品であり、阿片の幻想、使いきれぬ金銀財宝、失われた楽園、哀調を帯びた絢爛華麗、贅美を凝らした小部屋につながれたハーレムの美女が渾然となった幻想の東洋の絵姿なのだ。(『必携アラビアン・ナイト』、平凡社)

このようにマルドリユス版に描かれた中東のイメージが文学的な幻想であることを忘れてはなりません、その一方では多くの読者を魅了したマルドリユス版のおかげで、アラビアンナイトに親しみ、ひいては中東の文化に関心をいだく人が増えたことも否めません。ポルヘスにしても、マルドリユス版は(パートン版の次に) 読みやすいと褒めています。

マルドリユス版の底本

ではマルドリユスはどのようなアラビア語原典を底本にしたのでしょうか。先ほど確認したように、マルドリユス版にはカルカッタ第二版には載っていない一節が記されていました。

マルドリユス版は、エジプトで編集されたブーラーク版をもとに訳したということになっていますが、開巻早々からガラン版と似通った箇所もあるようです。マルドリユス版第九夜から第十八夜に入っている「バグダードの荷担ぎ男と三人の娘」を見てみましょう。豪壮なお屋敷にやってきた荷担ぎ男を相手に悪ふざけをはじめた三人娘が、全裸になってじゃれあう場面で知られた物語です。マルドリユス版を見ると、三人の娘にはそれぞれゾバイダ、アミナ、ファヒマという名前がついているのですが、バートン版にも東洋文庫版にもこの名前は出てきません。ガランが底本にしたガラン写本にも娘たちの名は書いてありませんし、ブーラーク版を底本にしたレイン版にも出てきません。ところがガラン版にはゾバイダ、アミナ、サフィという名が出てきます。娘たちに名をつけたのは、どうやらガランのおせっかいだったようです。

この物語は、バルマク家の宰相ジャアファルらを連れてお忍びでやってきたカリフ、ハーリーン・アッラシードが、次々とおこる不思議なできごとの謎を知るために、娘たちの身上を聞き出す筋立てになっており、黒犬をさんざんに鞭打ったあとに号泣した屋敷の女主人

と、恋の歌を歌ううちに胸がいっぱいになって倒れてしまったもう一人の娘が、自分たちの身にふりかかった数奇な運命を語っています。

バートン版、東洋文庫版、レイン版、マルドリユス版では、女主人に続いて身の上を語るのはお屋敷の門番をしていた娘なのですが、ガラン版では門番ではなくて、荷担ぎ男を連れて買物をした娘（ガラン版ではアミナ）が不幸な結婚の顛末を語っています。ところが原典のガラン写本では、結婚話を語るのは門番の娘（ガラン版ではサファイ）ですから、ガランの単純な誤読だったかもしれませんし、話の前半部分で出番が多かったアミナに焦点をずらせたガランのいきすぎた読者サービスだったのかもしれませんが。

一方、マルドリユス版では、不幸な結婚の顛末を語るのは他の版と同じように門番の娘なのですが、彼女にはアミナという名前がつけられています。ともあれこの話に関しては、マルドリユスがカルカッタ第二版やブローラク版などのアラビア語原典ではなく、「原典に忠実でない」としてジードにこっぴどくきおろされたガラン版を下敷きにしてうまく混ぜ合わせた可能性もありそうです。

マルドリユス版の種本

マルドリユスの翻訳があやしいことは、刊行中から指摘されてきました。「没我的逐字訳」であるはずの訳文とブローラク版がくいちがっているからです。するとマルドリユスは、自

分が翻訳の底本にしているのは北アフリカ（チュニジア）に伝えられていた十七世紀の写本だと主張しました。その写本こそ、ブーラク版が編集されるさいの親本だということです。現在のところ、マルドリユスの言う十七世紀の北アフリカ写本は確認されておらず、言い逃れだったのだろうということで一応の決着がついています。

マルドリユス版には、ガラン版はもちろんのこと、バートン版やレイン版にも入っていない話が数多く収録されています。特に十二巻から十六巻に入っている話の多くは、どのアラビアンナイト刊本にも載っていません。たとえば第九三七夜から第九五四夜にかけて続く「バイバルス王と警察隊長たちの物語」に入っているほとんどすべての話は、一八八三年に出版された『現代アラブの話』（ギヨーム・スピッタ・ベイ）からの剽窃ひようせつであったようです。

また、第九九四夜から九九八夜にかけて語られている伝奇的な「ジャアファルとバルマク家の最期」は、十九世紀にフランス語で出版された『アラブの女性——イスラーム以前と以後』という本からとったとされています。ただしこの話はアッバース朝の大歴史家タバリが残した『諸預言者と諸王の歴史』と題する、中東の歴史をかじった人なら誰もが知る名著に載っており、前掲書ではじめて紹介された話ではありません。

同じように、第九七一夜からはじまる「知識と歴史の天窓」という一連の物語群にしても、マルドリユスが十九世紀のフランス語書籍をはじめとする別資料から抜き取ってきたものとされています。このようにマルドリユスは、ブーラク版、ガラン版に入っていたいわゆ



パリ・サンジェルマンにあるマルドリユスの書斎。
遺族の方(中央)と自筆原稿等の遺品を整理する調査チーム。(著者撮影)

る「孤児の物語」(アラジンやアリババなど)、ブレスラウ版、十九世紀に出版された『ナイル溪谷の民話』、先ほど紹介した『現代アラブの話』、『アラブの女性―イスラーム以前と以後』などから物語を拾っていったようです。

アリババについては、モルジアナが兄カシムの家の女奴隷ではなくてアリババの養女になっています。アリババの原典写本は確認されていないわけですから、これはマルドリユスの脚色でしょう。シンドバッド航海記にしても、新旧二種類のテキストで大きな異同のある第六航海の後半部と第七航海では、二つのテキストを混ぜ合わせています。

マルドリユス版が映し出すもの

このようにマルドリユス版は、本人が主張したように未発見のアラビア語原典からの翻訳ではありませんでした。しかしながらアラビアンナイトという物語集の性質を考えるなら、はったりをきかせすぎた点は批判できるものの、彼の編集作業を全面的に責めることもできないでしょう。そもそもアラビアンナイトとは、特定の個人の手になる作品ではなく、編集の手が入るたびに新しい形をとる動的な存在なのです。近世の中東で編集された諸写本にしても、題名と粹物語、冒頭のいくつかの物語を別にする、定まった編集基準があつたようには見えません。つまりアラビアンナイトは、編集されるたびに新しい物語集として再生産されてきたのです。

ブーラク版にしても当時のエジプトで知られていた話を寄せ集めて成立したものでしたから、ナポレオンのエジプト遠征に同行した画家ドゥノンを魅了したというアラブの語り手のレパートリーが、ブーラク版に採録されている可能性も否定できません。また、中世のアラブ世界で物語集を編むさいにも、さまざまな文献から話を拾ってきたようです。このように考えてみるとマルドリユス版は、いかにもアラビアンナイトらしいアラビアンナイトだと言えるのかもしれませんが。

幻の未発見写本を盾にして底本を明示しなかったのは不誠実だったかもしれませんが、マ

ルドリユスは写本や民話に関する資料を数多く収集していたようです。最近、マルドリユスの遺族にあたる人にインタビューできましたので、残された膨大な遺品を目にすることができました。まだ確認中なのですが、調査が進めばマルドリユスの手元にあった情報が解明できるかもしれません。

ただしアラビアンナイトが中東の民話や古伝説を土台にしているにしても、バートン版やマルドリユス版が伝えるものは中東の現実ではなくてヨーロッパの幻想であったという点を見逃してはならないでしょう。中東は、ヨーロッパが相対する他者でした。ときに応じて敵対し、手をつなぎ、学びとり、影響を与えあいながらも決して同一化することのないものとして、あるときには純然たる幻想であり、一方的な夢を託す相手であり、逆に自らの敵意を反映する鏡でもありました。そしてヨーロッパはその鏡を見ることによって、自分の輪郭を確認し、自分の本質を規定したのです。

わかりやすく言えば、バートン版やマルドリユス版から見えてくるものは、中東の姿ではなくて中東を見るヨーロッパのまなざしなのです。世紀末の夢を背負って登場したマルドリユス版は、絢爛たる東方幻想のエッセンスが詰まった作品だと言えるでしょう。